深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「猫また」のうわさを聞いて、法師はどのように思ったか、本文中から抜き出してみよう。**

【答】 ひとりありかん身は、心すべきことにこそ。

▼ポイント▲ 「奥山に猫またがいる」「このあたりにも猫またが出る」という話を聞いて、法師の思ったことを抜き出す。「と思ひけるころしも」とあるのに着目する。

2 **「猫また」が現れた後の、法師の様子と行動を、順を追って、箇条書きにしてみよう。**

【答】 1　「正気を失う」（胆心も失せて）
2　「力も出ず、足も立たない」（力もなく、足も立たず）
3　「小川に転げ入る」（小川へ転び入りて）
4　「九死に一生を得て助かった」（希有にして助かりたるさまにて）
5　「はうようにして家に入っていった」（はふはふ家に入りにけり）

▼ポイント▲ 丁寧に記述を追って、法師の様子や行動を抜き出していけばよい。

言葉と表現の解答例

1 **次の傍線部の助動詞の意味と活用形を、それぞれ確認してみよう。**

(1) **人を食らふなる。（三四・2）**
(2) **山ならねども（三四・2〜3）**
(3) **人取ることはあなるものを。（三四・3〜4）**
(4) **見知れる僧なり。（三四・14〜三五・1）**

【答】 (1)　伝聞／連体形　(2)　断定／未然形　(3)　伝聞／連体形
(4)　断定／終止形

2 **最後の一文は、表現上どのような効果を上げているか、考えてみよう。**

【答】 最後まで「猫また」という怪物の話だと思わせておいて、最後に種明かしをしている。飼い犬が暗くても飼い主に飛びついて喜ぶことは誰にでも容易に想像ができるだろうから、この話に信ぴょう性を持たせる効果が期待できる。

言語活動の解答例

1　作者は法師をどのような人物として描こうとしているのか。本文の描写を手がかりにして、話し合ってみよう。

（意図）法師の人物像を深く読み取ることで、作者が主人公の法師をどのように捉えているかを知り、それを自分たちのこととして考えさせたい。

（手順）

1　本文の描写を手掛かりにしながら、作者が描こうとした主人公像を読み取る。いずれの意見にしても、作者はこの法師を批判的に捉えていることを読み取るようにしたい。

・「猫また」の噂を必要以上に恐れているように見えること。↓心の平静さを感じられない。

・連歌の賭物を懐に持っていた。↓法師の身分で賭事をしているのは俗なことである。

・「ひとりありかん身」↓頼る人もいない

・「飼い犬」↓犬を飼うことも俗である

2　作者の描き方に対して、自分の考えをまとめ、意見交換してみる。そこから、自分たちが何者かになって生きていくうえで、どのような心持ちや行為がふさわしいのかを考えられるようになるとよい。

・法師は修行の結果ふつうの人よりも高い次元の心持ちのある人であるべきだ。作者自身も法師であるから、法師のあり方、特に「えせ法師」に対しては厳しい見方をしているのであろう。

（ゴール）先に述べたように、できればこの話を参考に、将来的にであっても、自分に引き付けて考えることができるとよいが、当面、作者がこの笑い話を批判的意図で記していることを読み取りたい。

（畠山　俊）